早稲田大学大学院文学研究科紀要 第67輯（2022年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.67 (Mar.2022)

開高健「エスキモー」論

――一九六〇年代前半の再検討――

山田宗史

はじめに

開高健の研究史において、一九六四年のヴェトナム戦争体験は最も大きな画期として扱われてきた。吉田春生は開高を総合的に捉える試みにおいて、生涯を五期に分けつつ、「開高文学の全体を知ろうとするならば〔中略〕第三期の、ベトナムが数年かかって咀嚼し直される時代の検討なしで済ませるわけにはいかない」[1]と述べた。同様に開高のモノグラフに取り組んだ平野栄久は、第一章を「運命の結節点」と題してヴェトナム戦争体験の検討からはじめることで、その重要性を強調している[2]。

しかしながら、このヴェトナム戦争の重視は、その直前、一九六〇年代前半の作品に対する軽視と表裏一体であった。吉田は『ロビンソンの末裔』（『中央公論』一九六〇・五-一一）と「太った」（『文学界』一九六三・二）を結びつけ、この三年間を「小説の造形への意志」が消失する過程とのみ捉え[3]、平野は一九五八年の「フンコロガシ」（『新潮』、一九五八・五）から「エスキモー」（『文学界』一九六二・七）までをまとめて「それぞれ読ませるし、多方面な才能と筆力を感じさせるが、どこか弱い」[4]と断じる。ヴェトナム戦争体験を画期とするゆえに、その直前の作品は模索の時期として簡単にしか顧みられてこなかったのである。

しかし一九五七年の芥川賞受賞による華々しい文壇デビューとヴェトナム戦争での従軍取材の狭間にあたる一九六〇年代前半、開高は最も多産な時期を迎えていたと見られなくはない。小説以外にも『過去と未来の国々』（『世界』一九六〇・一〇-一九六一・四）や『日本人の遊び場』（『週刊朝日』一九六三・七-九）などのルポルタージュに挑戦し、紀行文も上梓している。あるいははじめての新聞連載である『片隅の迷路』（『毎日新聞』一九六一・五-一一）など長編小説を二作、短編作品も十作品以上発表している。後年の遅筆を自称する開高からすると、意外なほど豊富な作品数である。

本稿では一九六〇年代前半の活動から短編「エスキモー」を取り上げ、「模索」の時期にあった開高が追究していた課題を提示する。その上で、その主題のヴェトナム戦争関連作品への連続性を示すことで、画期を迎えて切り捨てられたのではない点を再発見したい。

一、「エスキモー」の発想

「エスキモー」は次のような物語である。

何らかの「事故」によってアメリカの保有する核を搭載した大陸間弾道ミサイルが発射され、それに対するソ連の反撃、そして両国の応酬によって地表は壊滅的な状態となった。偶然日本に滞在中であった西ドイツ、ソ連、フランスのひとびとに加え、飛行機の窓からミサイルを見たアメリカ人、さらに小説家（開高健という名である）をはじめとする日本人数名は、東京に天幕小屋を作って暮らしていた。破裂した水道管から噴き出る水を飲み、百貨店の跡地から罐詰や酒を集め、死者が出れば埋葬する。そのように暮らしていたある日、アメリカ人のハックが「いったい誰に責任があるんだろうな」と言ったところ、開高はそれが禁句であると注意する。しかし納得できないハックは天幕小屋のなかを聞いてまわるが、満足する答えは得られなかった。そこで利害関係のない第三者に知恵を借りるという案が出され、「エスキモー」[5]を召喚することに決まった。連れてこられたのが若者のヨクヨクと父の老人トクトクである。しかし彼らから逆に責任を問いただされ、それに対して上手く反論することもできず、状況は停滞したまま二人のエスキモーは帰っていってしまう。残されたひとびとは相変わらず緩慢に衰弱していく生活を続けるのだった。

何らかの誤りから核のスイッチが押され、焦土と化した日本に残されたアメリカ人、ドイツ人、フランス人、ソ連人、日本人が議論の末、エスキモーを召喚してその意見を仰ぐ――このような物語の筋には、発想の跡を明確に辿ることができる。一九六一年七月から、イェルサレムでいわゆる「アイヒマン裁判」を傍聴した開高が、次のような文章を残しているからだ。

> もしいまここで偶然の錯誤によって両者のボタンが押され、かりに何人かの〝文明〟圏の人間が生きのこったとして、誰が誰を裁くことができるだろう。エスキモーかピグミーを裁判長にでもするよりほかないのではあるまいか……。
>
> （「過去を語らぬあいつ」『文藝春秋』一九六一・三）

この一文に示される構図がそのまま転写されたような露骨な主題性は、しかし発表当時あまり好意的には受け取られなかった[6]。とくに江藤淳は「文芸時評〈下〉」（『朝日新聞』一九六一・六・二七）で厳しく批判し、同作で「エスキモー語には現在形しかない」というところから展開される、「なぜ現在核戦争防止に立上がらないか」

という大義名分の立派さは認めつつも、一機だけ残された航空機がエスキモーを運ぶために使われる点など物語上の「御都合主義」を挙げ、「調子の低い宣伝文学」と断じている。

ここで江藤は核戦争防止という大義名分を同作から読み取っている。しかしアイヒマン裁判についての一文を源流に置くことができるとすれば、ポイントは若干異なっていると言うべきだろう。そこで語られていたのはむしろ〝普遍的な正義〟の根拠を探ることであった。この一文と「エスキモー」が完全に対応すると安易に言い切ることはできないが、この齟齬には注意しておきたい。

例えばアイヒマン裁判において抱いた〝正義〟の根拠への疑いを解決するべく、「エスキモーかピグミー」という「第三者」を召喚するというアイデアが同作で仮想的に実行されたのだと仮定してみる。しかしそのとき奇妙なのは、結末部に至っても明確な解決が得られるわけではない点である。右の提案は挫折してしまったということなのか。果たしてこの両文の距離には何がしかの意味があるのだろうか。

二、エスキモー像の問題

まずは本作の成り立ちをあきらかにするために、同時代のエスキモー観について見ておこう。エスキモーが第三者として特に選ばれたのはなぜだったのだろうか。少なくともここには同時代的な関心との共振が見られる。

開高がエスキモーの存在に注目した一九六〇年代初頭は、日本においてエスキモーへの関心が高まった時期でもあった。一九六〇年には渡辺操を団長とする明治大学アラスカ学術調査団による広範な現地調査が実施され、その様子は連日『読売新聞』紙上で報告されたほか、民族学班として参加した祖父江孝男は帰国後、光文社カッパブックスから一般向けに『エスキモー人』（光文社、一九六一・八）を刊行している。また「エスキモー」発表より後になるが、一九六三年七月一一日には『朝日新聞』紙上で本多勝一による「カナダ・エスキモー」の連載が始まる。

このような日本におけるエスキモーへの関心の高まりを支えたのは、エスキモーがアジア系の民族であるという説である。学説として提唱されていたエスキモー・アジア起源説をもとに、彼らに対する日本人の奇妙な郷愁と親近感が醸成されていた。祖父江の著作は副題に「日本人の郷愁をさそう北方民族」と掲げ、章のひとつは「エスキモーはアジアからきた」と題されている。さまざまな論拠が挙げられているが、「どの顔も、おどろくほど日本人にそっくりなのである」（一七頁）、「エスキモーの顔がことのほかアジア人によく似ている」（二一六頁）というように、その容貌の日本人的、アジア的特徴が度々触れられる。この見解が一般的にも流通していたことは、子供向けの書籍でも語られていることから知れる。

前にかかげた何枚かの写真で、みなさんも気づいたことでしょうが、エスキモーは、日本人とよく似た顔つきをしていますね。[7]

このような知見と軌を一にして、開高もまた彼らの特徴をまずそのアジア的な風貌から描写している。

頬骨が高く、鼻がひくく、眼の細くて走った、彼らのアジア系の顔には、激しさと平静さがとけあい、気品と呼んでいいものがただよっていた。

しかし開高が連れ出した二人が強い未開性を帯びているのに比して、当時の文献からは既にエスキモーが文明化されていた様子がはっきりと見て取れる。例えばヨクヨクはアザラシ狩りの道具について「弓ですよ。鉄砲ではありません」と言って鉄砲に対する嫌悪感を示すが、むしろ狩りの中心的な道具が鉄砲となっていたことが、明治大学アラスカ学術調査団の報告をまとめた『アラスカ』（古今書院、一九六一・一一、二八頁）には出ている。罐詰の帆立貝の匂いを「腐っている」と評する、つまり加工食品に馴染んでいない様子なども、エスキモーが罐詰を喜ぶ様子がいくつかの報告で見られるため現実と隔たりがある。[8]

またヨクヨクもトクトクも性格は陰鬱に描かれるが、エスキモーが一般に明るく社交的であることは暗く厳しい氷原との対比で調査者に強い印象を与え、エスキモーに関する文献では頻出のことであるし、[9] 江藤の批判を呼んだ「現在形しかない」という言語的な特徴も事実ではない。[10]

このように比較してみると、当時の関心と方向性は共有しつつも、強く未開性を印象付けるように同時代の言説とは乖離したかたちで描かれていたことが分かる。エスキモー自体には重きは置かれず、未開性を書き込むための枠組みとしてエスキモーは導入されたに過ぎない。その結果として出現する国際情勢とは関わりのない存在としての「未開人」こそが必要だったのだと考えるのが妥当だろう。

しかし、「未開人」表象を利用した文明批評と言い切れない奇妙な点がある。「気品」という言葉遣いからはいわゆる「高貴な野蛮人」の典型的な描写として問題含みでもあるが、「高貴な野蛮人」が普通近代文明に対立する存在として（そして近代文明を打破する存在として）召喚されるのに対して、本作は彼らによってクライマックスを迎えることがないのだ。彼らの言葉は切実であるよりは空転している。すなわち、彼らの振る舞いは批判として十全に機能せず、単なる困惑をしか呼ばないのである。もし核戦争防止のメッセージを伝えたかったのであれば、もっとはっきりとした結末を用意してもよかっただろう。この噛み合わない構図は作品全体の人物造形から理由を探ることができる。

三、論争の構図

既にあらすじで紹介したように本作には「開高健」と名付けられた人物が登場するが、彼は名前だけではなく思想や経験も作者・開高と共有している。核についての考え方も開高そのもので、どうして核を防がないかと問い質された際には「私はこの四月に東京の外語大学と京都の同志社大学とそのほか三つの大学へ行ってアメリカの実験に反対するよう、講演をしましたが、学生はほんの僅かしか集まりませんでした」と述べ、その原因を学生にとってはラーメンを食べることの方が大事だったからだと説明している。これはルポルタージュ『声の狩人』（岩波書店、一九六二・一一）のあとがきで「四つほどの大学へ私は講演にでかけた」が、核に関する主張に賛成してくれた「みなさんの数は、食堂にいたみなさんの数にくらべると、お話にならぬくらい少数であった。想像力はラーメンの鉢から外へ出られないでいるようだった」と言っているのと同じ事情を指していると考えられる。

また「エスキモー」との対話に疲弊し横たわったとき陥る貧血状態はしばしば開高が「滅形」と呼んで描いてきたものである。[11] これは自伝的小説「見た」（『文藝』一九六三・五）の体験と並べると、類似が明確になる。

まずは「エスキモー」ではこのように描かれている。

おれは頭を毛布におとした瞬間に眼がくらむのを感じた。銀粉が散って踊った。たちまち視界がまわりからレンズを絞るように小さく、暗くなり、ただ黄ばんだ靄のなかをプランクトンのように無数の銀片がゆっくり流れ交うのを見るばかりだった。脳や肩や胸から血がひいて、体じゅうの肉と膜が見る見る白ちゃけていくのをありありと感じた。戦争中に栄養失調で貧血を起し、何度このような姿勢で駅のベンチや電柱のかげなどにかがみこんだことか。おれの体は病葉の葉脈のように透けて見えるのだという考えをその頃持った。

次に「見た」ではこうである。

道を歩いたり、超満員電車にのったりするたびに、たちぐらみがするようになった。ちょっとした急な動作のはずみには、きっと、発作が起った。とつぜん手や足から血がひいてゆく。くらくらと体がゆれ、眼が見えなくなる。写真機のシャッターを絞るように視界が急に周囲から黒くなり、小さくなり、縮まる。人や電柱や壁がたちまち遠ざかり、ついに見えなくなる。その暗がりのなかを無数の金属粉が、キラキラと閃きつつゆっくり右に左に、上に下に流れ交って、舞いはじめるのである。

ただし、開高自身の言説との一致は「小説家・開高健」に限られているわけではない。例えば「僕は日本文学の専攻だからときどき現代日本文学を読みましたが、日本の批評家も何かに気がねしているようでした。フランスの批評家もそうです。批評を読むと毎年傑作が生れているということなのに、いっぽうではおなじ人が現代文学には何もないと言ってます」という発言はニコジムのものだが、「フランスの批評家もそうです」という文言を取り除いてしまえば、開高がしばしば漏らす口吻と一致する。また同じくニコジムがソ連の文化的な解放に希望を見出しながらも抱く、「もし政府が、キューバへゆく義勇軍を募ったら、僕らはよろこんで参加しようとも思っていた。僕らは革命を知りませんからね。ほんとにそう思っていたんです」という矛盾したファナティズムもまた、サツマイモの油で飛行機を飛ばそうとする大人の策を嘲笑する一方で「いざとなれば地雷を抱いて戦車の下腹へかけこむ覚悟でいた」[12]第二次世界大戦中の開高自身の変奏である。

そのほか、フランス人のコンタンは言葉について次のように述べる。

みんながあの火のことで無関心になったのは、私流に表現しますと、言葉が疲れてしまったからだと言えましょう。『平和』も、『自由』も、『正義』も、『戦争』も、それに『ニシン』もですな、すべて言葉があまり使われたものだから、どの言葉も蒼ざめて、やせてしまったのですな。『孤独』も『絶望』もあまり裸にしたもんだから風邪をひいてしまったのです。

「孤独」や「絶望」という言葉の無効力感は、先行する小説「流亡記」（『中央公論』一九五九・一）で、「孤独や絶望や不安について特権をもつものがひとりもいなくなった」時代には「言葉は壺のかけら」のようだった、というかたちで表現されていた。アウシュヴィッツ強制収容所を取り上げた「眼のスケッチ」（『新潮』一九六一・五）には「人びとはこの戦後、まるで豚のように〝孤独〟や〝絶望〟をむさぼることにふけった。この言葉ほどよごれて使い古されながらいつも市場で売れる言葉はない」という一節もある。また「生者が去るとき」（『新潮』一九六四・五）では「言葉が塵と床油にまみれてころがっているような気がした」、「おれの言葉も騎士の言葉もこわれた古い裏庭の玩具のように足もとでごろごろとしていた」というように、言葉を実体化・擬人化してその疲弊した様子を言う手法が使われている。

さらに絶対の他者であるはずのエスキモーにすら、開高の影が差している点は注目すべきだろう。江藤が論難した時制のほかにも、エスキモーの言語にはある特徴が存在していた。コンタンが「『平和』と『自由』の解釈」について口にすると、ヨクヨクは敏感に反応する。

父には理解できません。私にも理解できません。エスキモーの言葉では、トナカイはトナカイで、ニシンはニシンです。一つの言葉には一つの意味しかないのです。それからこれは私の言葉ですが、あなたの言う『平和』と『自由』という言葉を父に訳してやることができないのです

トナカイやニシンといった言葉が一つのものしか指示しないこと。またヨクヨクが続けて言う「それがそこにあるということが感じられないほどたくさんあるものについて、どうして言葉をつくる必要がありますか」という、言葉の確実性。このような性質は、以下で詳細に述べるが開高が言葉に求めて果たせなかった夢なのである。

以上のように、本作の登場人物の体験や開陳される意見は、その多くを開高自身の経験や思想に負っている。言うなれば、開高自身が抱いていたいくつかの見解を各登場人物に割り振って構成されたような小説なのだ。「御都合主義」や「図式的」という批判はそれゆえに生じたと言うこともできるだろう。

しかし作品の出来はともかくとして、そのような「自問自答」の意味は問う必要がある。なぜ他者の口を借りて自らの言説を語ったのか。ここには可能性と、その一方で問題があるように思われる。

四、夢の言葉

まずは可能性を検討しておこう。エスキモーの言語はそれ自体一種の可能性としてあった。開高にとってその確実な、実感を帯びた言葉は一度探究し、そして挫折させられたものだからである。

しかし、なによりかより、男には、言葉というものがあやふやすぎてならなくなったのである。たとえば、いちばん手ごたえのありそうな『木』とか、『山』とか、『風』とか、『船』とかいったようなものでも、ためしにそれを口のなかで十回くらいくりかえしくりかえしつぶやいてみると、たちまち正体がさらけだされる。なにもかも砕けて、散って、ぼやけてしまうようなのだ。キ、キ、キ、キ、キ、キ。ヤマ、ヤマ、ヤマ、ヤマ、ヤマ、ヤマ。カゼ、カゼ、カゼ、カゼ、カゼ。なぜ木が『キ』なのか、なぜ山が『ヤマ』なのか、また、なぜのどがつまってつめたい汗のでることを『クウフク』と呼ぶのか。どうにもこうにもわからなくなってくるのである。

自伝的小説「笑われた」（『新潮』一九六三・三）の一節である。「これ以上はどう解釈しようもない、究極の固さをもつ」言葉、「いつさわってもおなじ固さと、鋭さと、おなじ手ごたえをもって彼のく

ちびるや、胸や脳の皮などにふれてくる」言葉を求める試みのなかで、男＝開高は右のような事態に立ち至った。理想的な言語の追究は洗練や発展を促すよりも、言語への疑いの昂進をのみ惹き起こす。「笑われた」では、この後、娘の誕生が語られ、押しとどめることのできない現実の進行にそうした疑いを紛らすほかない「男」の悲しみが強調されていく。

つまりエスキモーから突きつけられる言語観は開高が追い求めていたものであり、その探究に一度挫折した開高（が書く人物）にとって、それに上手く切り返すことができないのは道理であった。このような、求めても諦めなければならないことが分かり切った理想を「未開」の側に与えたところに、その批判が十全に機能しない理由がある。「笑われた」において純粋な言葉ではなく猥雑な言葉の使用が許されたのは、状況に強いられて断念や諦めに追い込まれたからに過ぎない。開高にとってそれは乗り越えや弁証法的な発展に結びつくものではない。

アイヒマン裁判の一文の「提案」から「エスキモー」の「無効化」へと移行する際に導入されたこの言語観は、問われていた正義の根拠について解決を与えてはいない。言い換えれば、本作は核戦争という国際的な問題に対する実践的な〝正義〟を提示する小説としては作られていない。しかしこの言語観の出来と核戦争という一見奇妙な結合に、ひとつの可能性が見出せるのではないか。

例えば川村正典の指摘が手掛かりになる。[13] 川村は、右に引いた開高の言語意識を「迷路」と評した。言葉が持つ「意味、像という抽象的な側面と音、文字という具象的なフォルム」の恣意的な結びつきを意識してしまったがゆえに、その紐帯が曖昧になっていく事態を描いたものとして、さきの描写を捉えている。「迷路」の語はグスタフ・ルネ・ホッケから引かれているが、ホッケの『迷宮としての世界』（種村季弘・矢川澄子訳、美術出版社、一九六六・二）では、それがある歴史的条件下で生れる精神的態度の表徴と捉えられている。同書で扱われる「マニエリスム美術」は一般的な美術史においては後期ルネサンスに現れた技巧的（マニエリスティッシュ）と言われる作品群を指すが、彼はそれを一五二七年のカール五世によるローマ劫掠が惹起したある種の精神状態の表出と見る。侵攻、破壊、略奪によって荒地と化したローマを前にしたひとびとの感じた世界に対する絶望を引金として充満した不信の感情。この絶望を歴史上繰り返される「常数」として歴史的な枠組みにとらわれない人間論を展開するのが同書である。そしてその感情はひとつには迷路愛好として現れる、とホッケは述べる。

川村の指摘を敷衍して絶望の精神を導き出すのは、開高についても必ずしも的外れではない。「見た」をはじめとする自伝的小説の背景には戦争によって出現した荒地＝〈焼け跡〉が存在するからだ。さらに、「驚きたい」という驚異への傾性、「笑われた」における言語意識、「太った」における「おれは嘘つきやぞ！」という発言のパラドクス……これらはホッケが『迷宮としての世界』で語る「マ

ニエリスム」の諸特徴とよく合致する。

そして一部は既に挙げたが、「エスキモー」の記述は自伝的小説群と多くを共有している。その際確認したように、エスキモーの言語観が自伝的小説と重なるとすれば、純粋と猥雑の相克の背後に想定される〝荒地を前にした絶望〟という精神状態もまた、「エスキモー」に移入されたことが予想される。

自伝的小説における言語の解体は、第二次世界大戦後という荒地に起源を持った。この関係性が核戦争後に移し替えられたのが「エスキモー」なのではないだろうか。既に目にした戦後の風景を核戦争〈後〉という未来に置いてみせ、その際の「迷路」的な精神状態を望見すること。この破壊と言語の解体が結びつく精神的風景を示し得たところを、本作のひとつの達成と言うことができるだろう。

しかし、言葉の夢をエスキモーに語らせるという仕掛けには問題があっただろう。「他者」に理想を話すこの方法は現実の関係性を単純化して表象してしまう。このような仕方で核時代の国際関係を書いたために、提案から無効化へと後退したのだとこの作品を批判することも可能である。そしてこの「他者」の取り扱いの問題はのちのちまで尾を引くことになる。

もう一度本作の構図を確認しておくと、日本に残された日本人（開高）、アメリカ人、フランス人、ソ連人、ドイツ人が、第三者としてエスキモーを呼び、話を聞き、そこで展開される発言内容として、前者に開高の現実、後者に開高の夢が仮託されている。この時点でひとつ明らかなのは、開高がアメリカやフランスといった西洋の国々と同じ側に立ってエスキモーに対している、ということである。「彼らのアジア系の顔」を認めつつも、開高の位置はアジアの側ではなく、西洋にあった。

その際、言語が特異なものとされたのも徴候的と言える。スティーブン・ピンカーが挙げたように、エスキモーにはしばしば言語的な「夢」が託されてきた。雪を言い表す語が英語以上に豊富で、四〇〇以上あるという説である。ピンカーはこれが事実誤認であることを明らかにした上で、ここにある「他の文化圏のものの考え方を西欧のそれに比べて異様で奇怪だと見下げたがる人々の興味」を指摘している。エスキモーの持つ雪の語彙がたとえ実際に豊富だったとしても、それは印刷業者が活字の形にいろいろな名前をつけていることと何ほどの差があるだろうか。こう考えてみれば、エスキモーの雪の説には「エスキモーが特に奇異な存在である」という差別的なまなざしが前提されていたことが判明する。ピンカーは、エスキモーの語彙の嘘の批判者のひとり、ジェフリー・プラムの言葉を借りて説明する。(14)

開高もまた、全く無根拠な内容ではあるが、エスキモーに言語の夢を託していた。この点でまずピンカーが指摘したような類型化の傾向を共有する。さらに、作中ではエスキモーを「アジア系」と描写した上で、日本人（開高）が西洋人とともに彼らと対する構図が設定されている。このことによって、あたかも日本とアジアが対立

するかのように描き出されてしまったのである。

おわりに

開高健「エスキモー」は同時代のエスキモーへの関心と共鳴しつつ、それらに見られるものとは隔たった極端に未開性を帯びたエスキモーを描いた。これは一見〝未開と文明〟の二項対立の構図によって現代を批判する（あるいは核戦争防止を訴える）もののように思われる。しかし同作は一方で開高自身の言説を散りばめたような構成になっており、それは未開性を期待されたはずのエスキモーにも及んでいる。こうした点からエスキモーと生き残りの人々の対立は「未開と文明」とだけ言い表して済むものではないと考えられる。

エスキモーが口にする言語観は開高自身に挫折をもたらした「純粋な言葉」の理想であった。つまり本作の二項対立は〝未開と文明〟ではなく「純粋と猥雑」といった類のものであったことになる。この対立は止揚を目指すものではなく単なるアポリアとしてしか扱われていなかったゆえに、どちらかが正しいというものではない。そうした意味で「エスキモー」で展開される議論は正当性を見つけるというよりも一種の心象風景の描写であったと言うことができる。

その点に一種の可能性を見たが、夢を代表する存在としてエスキモーを登場させるという仕組みは問題含みである。この場合、構図としては開高は西洋の側に立ってエスキモーに対することになり、エスキモーをアジア的な姿で描写しつつも、日本人にとっての「他者」として表象している。ここには日本をアジアから切断するまなざしがあるのである。

このような日本の立場に関する認識は、ヴェトナム戦争との関わりにおいて回帰してくることになる。その関係を最後に述べておこう。

開高がヴェトナム戦争を描いた作品には次のような一節がある。

> 《正義》の観念があれば残酷は昂揚を誘いだすが、いつも久瀬は死者のこちらに佇み、とどまり、そのひらきっぱなしの乾いた眼をまたぐことができない。この光景に出会うたびに彼は闘牛の死を観客席から見おろしている人を感ずる。悲愁、痛惨、何を目撃しようが彼はついにこの国では第三者でしかない。帰りの航空券をポケットに入れている男に、ここに生れ、ここに住み、死んでいくしかない人が、どう触れられよう。
>
> （「岸辺の祭り」『文学界』一九六七・九）

「正義」「第三者」といったここまで論じてきた「エスキモー」に類した単語が現れるこの文章からは、「正義の観念」や「第三者」といった問題が引き続き思考されていたことが窺われる。あるいはヴェトナム戦争報道に関して、その情報の曖昧さを強調した感想に

は、しばしば言語の確実さの希求が見られる。言語観についても解決を見たわけではなかった。

先行研究においては主に前者の「第三者」の問題が注目されてきた。イレーナ・パウエルは、「この「視姦者」の役割への限定に対する持続的な不安は、『ベトナム戦記』と『輝ける闇』から後の「岸辺の祭り」にわたる開高のヴェトナム関連作品を貫流するテーマである」[15]と端的に述べているし、中井亜佐子は『ベトナム戦記』（『週刊朝日』一九六五・一-三）から『輝ける闇』（新潮社、一九六八・四）への書き直しの過程において変更が加えられた処刑シーン（前者では一度、後者では二度行われる）を取り上げ、後者の二度目の処刑での主人公の反応から、開高が安全な第三者という立場を避けがたいものとして強調し、受容したことを読み取っている[16]。

しかし日本人である開高が自らを「第三者」と規定する点にはさまざまな問題があるだろう。例えば第二次世界大戦において日本とヴェトナムは決して無関係ではなかったこと（作中では戦争中からヴェトナムに暮らす日本人について若干触れられてはいる）。開高が従軍記者として取材をする際にはアメリカ軍の許可を得、アメリカ軍と行動をともにしたこと。南ヴェトナム解放民族戦線とアメリカとの間で戦われたヴェトナム戦争において、「アメリカ」とともにある時点で、既に「第三者性」は無垢なものではあり得ない。ここにはアジアと日本を切り離し、エキゾチックな他者として表象する傾向と、日本を西洋の側に置く視点という、「エスキモー」から連なる問題が示されている。

従来ヴェトナム戦争体験に関して論じられてきた「第三者」の問題は、「エスキモー」から既に主題化されていた。この間に画期があったのか、あるいは単に連続が認められるのみなのか、これはのちの作品と併せて検討する必要があるだろう。しかしながら、少なくともその前提として、「エスキモー」は決して見過ごしてはならない作品なのである。

注

（1）吉田春生『開高健・旅と表現者』（彩流社、一九九二・一）、一一頁。

（2）平野栄久『開高健　闇をはせる光芒』（オリジン出版センター、一九九一・九）。

（3）前掲吉田『開高健・旅と表現者』、六四頁。

（4）前掲平野『開高健』、一三六頁。

（5）「エスキモー」という呼称は現在差別的とされることがあるが、正確に対応する語が存在しないため、本稿では作中の言葉として「エスキモー」を用いる。ただし作品名との混同を避けるため、カギカッコなしで表記する。

（6）白井浩司は「観念が図式的でいっこうに面白くない」（「民主主義文学と私小説〈文芸時評〉」『文学界』、一九六二・八）、河上徹太郎は「公式主義文学の一形式であり、自由な創造も想像も許されない」（「文芸時評　下」（『読売新聞』夕刊、一九六二・六・三〇）、と述べている。ありきたりであるという批判は村松剛「文学の冒険と形式　問題ふくむリアリズム批判7月号の文芸時評」（『北海道新聞』、一九六二・六・二五）、磯田光一「文芸時評」（『東京大学新聞』、一九六二・六・二〇）にある。

（7）朝倉隆太郎『世界の風土』（国民図書刊行会、一九六〇・五）。日本人だから「アジア系」と見るわけではなく、西洋の観察記録においても共通の特徴が触れられている。「婦人は男子よりも小柄が普通だ。どちらも頭が大きく、円く、顔は偏平で頬骨は目立って高い。鼻は小さく眼は狭い割れめのようだ。」（パウロ・シュルテ『白い地獄』東良三・北沢章平訳、二玄社、一九五九・九、四三頁）。G・ド・ポンサン『極北の放浪者』（近藤等訳、新潮社、一九五七・一〇）も「エスキモー人」を「アジア人」「東洋的」と評している。

（8）祖父江がエスキモーを歓待したときの様子を次に示す。「急造のテーブルにクラッカーやらバターやら並べたが、とくに日本製のチーズや罐詰のたぐいはすてきに好評で、盛んにたいらげる」（前掲祖父江『エスキモー人』二七頁）。

（9）前掲ポンサン『極北の放浪者』はとくに印象的に描写している。「彼らは、気落ちした、陰気で、自殺でもしそうな人たちにちがいないと思われるだろう。ところが、実際には、朗らかで、笑ってばかりいる連中なのだ。」（八〇頁）

（10）前掲シュルテ『白い地獄』には「エスキモー語」に触れた部分があるが（三九 - 四二頁）、このことは語られていない。「動詞の変化」について述べているところからすると、過去形はあるように推測できる。前掲ポンサン『極北の放浪者』には「エスキモーの言葉というのは、一語一語が、この眼の光なのです。それは、起ったことと、これから起ろうとすることを、同時にあらわしています」（一五四頁）という発言はあるが、これは一種の「含み」を意味しており、過去形と未来形が存在しないという意味ではない。

（11）「見た」ほどの一致はないが、「フンコロガシ」にも「自分が薄く透明な膜につつまれ、ほとんどあらゆる音や物の侵入するままになっていることが感じられた」という身体の透明感として「滅形」の表現は現れている。

（12）『輝ける闇』（新潮社、一九六八・四）。同じ部分に「その愚劣と一日も早く玉砕したいという憧れとは矛盾しなかった」ともある。

（13）川村正典「迷路から――開高健論（3）」（『水脈』、一九七九・六）。

（14）スティーブン・ピンカー『言語を生みだす本能［上］』（椋田直子訳、日本放送出版協会、一九九五・六）、八五 - 八七頁。

（15）Irena Powell, *Japanese Writer in Vietnam: The Two Wars of Kaiko Ken (1931-89)* (*Modern Asian Studies*, Vol. 32, No. 1. Cambridge University Press, Feb., 1998).

（16）Asako Nakai, *The English Book and Its Marginalia: Colonial/Postcolonial Literatures after Heart of Darkness* (Rodopi, 2000).